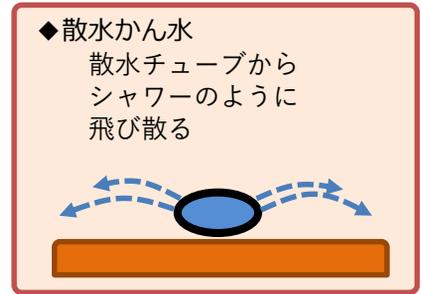
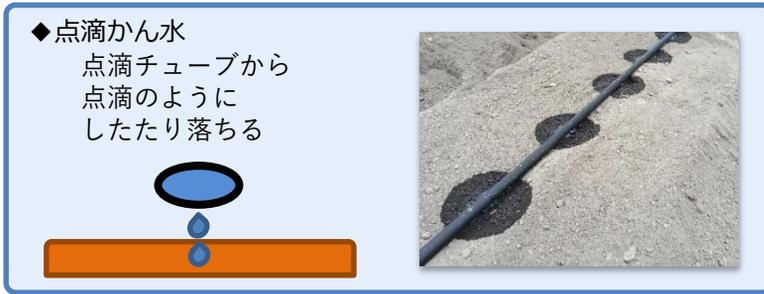


夏秋ミニトマトのかん水方式によるかん水量の違いと収量性

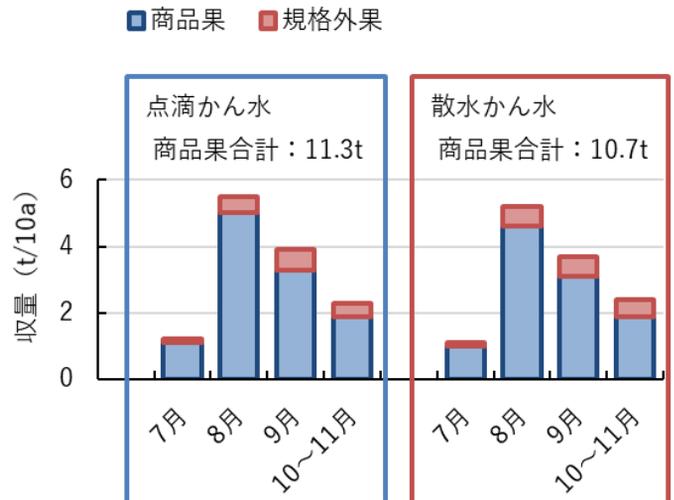
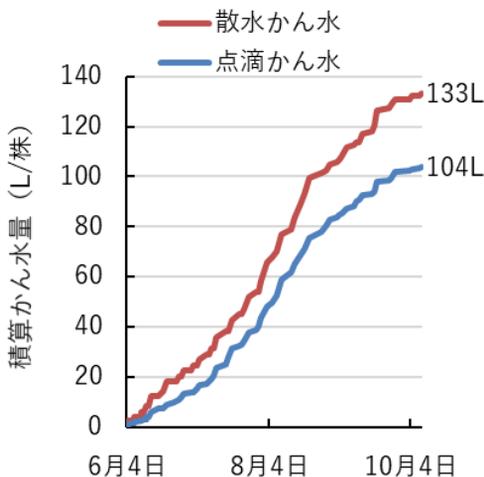
夏秋ミニトマト栽培の省力化技術のひとつとして、かん水と追肥の自動化への関心が高まっています。自動化の導入時は、かん水方式を点滴チューブを利用した「点滴かん水」にすると、必要な機器類を小型化・低価格化できるため、費用を抑えることができます。

点滴かん水は、かん水量が少ないため夏場の収量低下が懸念されますが、散水チューブを利用した「散水かん水」と比較した結果、収量や糖度がほぼ同等であることが明らかになりました。



かん水量と収量・糖度

- ◆ かん水量：作土のpF値が2.1となるようにかん水した結果、総かん水量は、点滴かん水が104L/株となり、散水かん水の133L/株に比べて、2割程度少なくなりました。
- ◆ 収量：点滴かん水が11.3t/10aとなり、散水かん水の10.7t/10aと同等でした。また、夏場の収量低下や、着色不良果など規格外果の増加はみられませんでした。
- ◆ 糖度：点滴かん水、散水かん水とも7.6%で、かん水方式による違いはありませんでした。



技術の活用・注意点

- ◆ 本試験は、ミニトマトの品種「サマー千果」を令和元年5月24日に定植して、同年7月18日から11月7日まで収穫して得られた結果です。点滴チューブは「ストリームライン60」、散水チューブは「ミスアンスイNEWマルチ60」を使用しました。